年頭の御挨拶

新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様におかれましては、心新たに五十四年をお迎えになられた事と存じます。

昨年をふり返りますと、いろ〳〵の事がございましたが、とりわけ当会にありましては、発会以来会長をお努め頂いた、髙畑会長の御逝去は、辰巳会にとりましても、又経済界にとりましても誠に残念な事でございました。

一方、我が国の経済は御高承の通り、円高の影響を諸にこうむり、鉄鋼を始め造船業界等、従来の基幹産業の不況は、益々深刻さを増しております。

政府が打ち出している景気浮揚策はあるものの、一部業界を除き、全般的な回復は遅々として進まない状態が続いております現在、今年は、各業界共これに対処する為の積極的な体制強化と合理化を計らねばならない年でもあります。

この様な環境の中にあって、いち早くしかも慎重に世界経済の動向を見極め、適切なる対処を施さねばならないと思っております。

辰巳会も、発会以来早くも十九年を迎え、会員の皆様の結束と御協力により数々の会合を企画して頂き度く、本部を始め各支部の幹事殿の積極的な御意見を期待して止まない次第であります。

又「たつみ」誌も発刊以来三〇号を数え、益々盛り沢山の内容により皆様の身近な会報となります様念願致しております。

最後に会員の皆々様には本年も御健康で精一杯御活躍されます事をお祈り致しまして年頭の御挨拶と致します。

会長　鈴木治雄

栄光をしのぶ

心に生きる鈴木商店

「……神戸高商での共同生活、そして鈴木商店入社以来実に七十有三年間の永きにわたって形影のごとく一緒に歩いてきた友を失い、私の心に大きな穴がぽっかり開いた思いです。

……鈴木商店での隆盛の時代の思い出もさることながら、鈴木商店が倒産し、苦しい中から二人で力を合わせ、三十九人の同志を糾合して日商の再生を進めたことが最も心に残る思い出……」

心友、日商岩井相談役高畑誠一（鈴木商店二代目店主鈴木岩治郎の女婿）の遺影を前に、肩をふるわせ、幾度も声を詰まらせながら弔辞を述べる日商岩井相談役永井幸太郎。その肩を落としたうしろ姿は、九十一年間の人生のうち七十三年も行を共にした二人の関係を知る参列者の涙を誘った。

■波乱に富んだ人生

十月四日、大阪市南区の東本願寺難波別院（南御堂）で挙行された高畑の葬儀には多くの財界人にまじって、全国から高畑に最後の別れを告げに集まった「辰巳（たつみ）会」会員の年老いた姿が目を引いた。おそらくこの人たちにも、高畑と苦楽を共にした鈴木商店時代および鈴木商店倒産後の波乱に富んだ人生のことが脳裏をよぎったことだろう。

辰巳会は第一次大戦中の軍需ブームに乗って三井物産とトップの座を争うまでに大きく飛躍した後、金融恐慌の波にもまれて昭和二年に倒産した鈴木商店関係者の集まりである。昭和三十五年、鈴木商店の大番頭金子直吉亡き後の鈴木系企業の総帥といわれた高畑を会長として全国組織を整えて以来、毎年春に全国総会を開いている。辰巳会の名は鈴木商店の屋号「辰巳屋」にちなんで命名した。

鈴木商店が倒産してちょうど半世紀を経た五十二年五月、京都・宝池の国立京都国際会館で開かれた「回顧五十周年全国大会」には、鈴木商店の女主人鈴木よねの孫で太陽鉱工社長の鈴木治雄、金子の二男で元東京大学教授の金子武蔵、金子の女房役だった柳田冨士松の長男太陽鉱工監査役の柳田義一ら二百十二人が全国から集まった。

創始者である野口遵を慕って、春秋二回の総会を続ける旧日本窒素肥料関係者の「関西遵風（じゅんぷう）会」、さらには旧大阪商船ＯＢの「松柏（しょうはく）会」、旧江商ＯＢの「江商社友会」など戦後、財閥解体や合併などによって姿を消した企業のＯＢの集いはいくつかある。しかし、倒産という憂き目にあいながら、半世紀を経た今日まで関係者がなお集まりを続けるという例は希有だろう。

毎月一回開かれている幹事会会場をのぞいてみた。集まったのはかつて日本化学繊維検査協会理事長を務めた八十四歳の大幡久一から日本製粉の子会社、日本商事の常務だった七十二歳の小倉五郎まで第一線を退いた人ばかり。

「鈴木が倒産した時、帝人に移っていた私はモラトリアムが起こりそうだといって技師長だった久村清太さんから、銀行から引き出したばかりの五十万円を保管してくれと頼まれた。ボ

ストンバッグに入れて自宅に持ち帰り、洋服ダンスにしまったが、不安でならず、結局、事務所にとって返し、ごみ箱にかくしました」と大幡がいえば、「私は若かったからもらった退職金で六カ月も飲み歩いた。しかし鈴木の麦粉部にいたおかげで、一生小麦畑一筋に過ごせた」と小倉。そこには生き生きとした表情で鈴木商店を語るOBの姿がみられる。

■若い者に仕事まかせた

柳田は言う。「鈴木は支店長、課長にも一流の人材がそろっていた。そこで商売を覚え、もまれたことが鈴木倒産後も役に立った。鈴木は私たちの心の故郷なんですよ」。

また「金子直吉に対する敬慕の念が辰巳会を支えている」と語るのは、金子の秘書を永く務めた萬座興産社長の田代義雄。「入社三年目、弱冠二十五歳の高畑さんを世界の金融、貿易の中心地のロンドンに派遣、縦横無尽の活躍をさせたように、若い者にどしどし仕事をまかせて、人材を育てた」。

産業復興公団総裁を務めた長崎英造、衆議院副議長、厚相などを歴任した金光庸夫、帝国人造絹絲会長として活躍した久村清太、東京都副知事、呉造船社長を歴任した住田正一ら鈴木倒産後、多くの人材を輩出したのも金子の教育のたまものだろう。

■天下三分宣言書

帝人、神戸製鋼、日商岩井など鈴木系企業も親会社の破たんを乗り越えて発展している。「岩井産業との合併を決断したのは、金子さんがロンドンの高畑さんに書き送った〝三井、三菱を圧倒する乎、然らざるも彼等と並んで天下を三分する乎、是鈴木商店全員の理想とする所也〟という天下三分の宣言書を一日たりとも忘れたことがなかったからだ」。これは当時日商社長だった西川政一の述懐だが、鈴木系企業の活躍も金子に学んだ鈴木の積極果敢な事業精神をうまく取り入れていったからだろう。

柳田によると「総勢七百人余の辰巳会会員の平均年齢が七十七、八歳という高齢に達したことが最大の悩み」という。しかし高畑を亡くした辰巳会は太陽鉱工社長の鈴木を新会長として、「鈴木商店が果たした役割と金子に代表される鈴木の事業方針を正しく子々孫々まで伝えたい」とする会員すべての願いを果たしていこうとしている。

（敬称略）

（53・10・24日経・つどう関西の経済人）

国益志向の経営

神戸大学経済学部助教授　桂　芳男

「産業自立」の達成に照応した国益志向的経営理念は、多角化志向の経営戦略を工業化の当初から自明のこととしていた。金子の経営戦略は、それが超多角化志向であったところに固有の特色があった。金子は総合商社の情報企業性能をフル活用して超多角化志向戦略を展開し、鈴木を巨大な工業化の組織者に仕立てたのであった。

金子は野中兼山の殖産興業志向型の実学的儒教精神の継承者であった。金子はまた幸田露伴のいう「営為を事とする人間」類型に属する典型的な企業家であった。

「金子マイナス事業イコールゼロ」といわれた金子の旺（おう）盛無比な事業欲が、金子の天下三分の覇権志向や国益志向の経営理念とうまく連動したところに、金子の超多角化志向の経営戦略が火を噴いて展開され、鈴木の史上類例をみないビジネス・サクセスが達成された秘密があった。しかし、金子の旺盛すぎる事業欲が鈴木の命とりになるのである。

だが、鈴木商店は金子の経営理念・戦略によって「企業の供給者機能」を超えた高い次元の「企業の社会的責任」を遂行し、わが国の工業化過程に不朽の名を残すことになったのであった。

金子直吉の大実業家としての神髄は、彼自身が作成した事業方針に率直に表明されている。金子はいう。「平素コリ如何ナル仕事ニテモ国家利益ニ反スルモノハ是ヲ為サズ、何事ヲ為スモ国家ノ利益ヲ眼目トシテ着手スルハ彼等の平生ナリトス」。

それは典型的な国益志向型の経営理念だった。そこでは国家・社会の利益が優先され、利潤追求は副次的とされた。金子直吉は、典型的な共同社会中心的経営者であって、自己中心的企業者では決してなかった。金子の無欲恬（てん）淡、高潔な人格がさらにそれを清冽（れつ）かつ重厚なものにしている。

経営理念は経営戦略を規定する。当時の緊急を要した国家目標

＜火曜日・金曜日に掲載＞

生涯、商社マン第一号の誇り

高畑誠一氏逝く

「チェアマン！」「私に発言する機会を与えて下さらないか」

四十九年、神戸商工会議所で開かれた経団連と地方会員との懇談会でこの九十歳近い老人が流ちょうな英語を操ってしゃべり出した。他会員の現状報告を聞いていた土光会長もしばらくきょとん。

その老人は十九日逝（い）った高畑誠一氏。英国仕立ての紳士ぶりと、海外での商社マン第一号として生涯、誇りをきょう示した人物。

〝三国間貿易〟編み出す
英国仕立ての紳士、ゴルフ紹介

鈴木商店を支え焼き打ち―倒産とドラマチックな大正、昭和初期の神戸経済史を彩った主役としてあまりにも神戸になじみが深い。

明治四十二年、出光佐三（出光石油）永井幸太郎（元日商社長）両氏とともに、神戸高商を卒業、水島鉄也校長のすすめに従って鈴木入りした。そのころの鈴木は金子直吉氏が健在。砂糖、樟（しょう）脳のほか、神戸製鋼を買収するなど拡大の一途をたどっていたさ中、英語に強く、経済に明るい高畑氏を重用し、早速世界経済の中心であるロンドン支店長として送り込んだ。

ロンドンでのビジネスマンといえば三井、横浜正金など数人。その中に割って入った弱冠二十七歳の高畑氏は、ロスチャイルドなどユダヤ系会社や商社から抜け目なく情報を収集し、的確に本店に打電した。

「貿易は情報」が口グセの金子氏の思惑どおり、やがて世界第一次大戦がぼっ発。鉄、小豆、砂糖は日に日に暴騰を続けた。鉄はわずか半年で二倍という高値。

「手あたり次第に買いまくれ」という金子氏はこの時「日本海々戦に於ける東郷大将が彼の皇国の興廃この一戦に在り」ではじまる有名な天下三分の書を送っている。三井、三菱を追い越せというすさまじい金子氏の覇気は先兵としての高畑氏の情報がすべてであったことはいうまでもない。また三国間貿易という新機軸を編み出したのも高畑氏。それがズバリ当たって、焼き打ち（大正七年）後、長駆した鈴木は、貿易面でライバルの三井を追い抜いた。

その鈴木は後に倒産するのだが、高畑、永井コンビでみごとに再生、今日の日商岩井の基礎を築いた。その因は高畑氏の合理に永井氏の内政がうまくかみ合ったためといわれている。

また日本に最初にゴルフを紹介し、ルールブックをほん訳したのも高畑氏。昭和七年広野ゴルフ場設立に奔走し、発起人代表となった。

古きよき大正、昭和期を、合理、覇気、スマートという商社マンらしさで多彩に貫いた人だが、先の小野三郎氏（元帝人製機社長）に続いて、鈴木のドラマチックな証言者がまた一人逝った。（53・9・2・神戸新聞）